父親・母親の言葉かけと青年期女子の自尊感情

○平田裕美¹・小川由希子¹（非会員）

（¹女子栄養大学）

キーワード：親・青年期・自尊感情

Expressions of Fathers and Mothers, Their affect on Daughters' Self-esteem.

Hiromi HIRATA¹, Yukiko OGAWA^{1, #}

（¹Kagawa Nutrition University）

Key Words: self-esteem, adolescence, parents.

目 的

本研究では、疾風怒濤の時期と言われる青年期の子どもの心理的適応性のひとつとして、他人との比較により生じる感情だけではなく、自分自身を肯定的に認めたり、評価したりすることを意味する自尊感情に着目し、この感情に直接影響する要因・媒介する要因を仮定し、因果関係を明らかにすることを目的とした。この関係性を検討するにあたり、先行研究では、成人後の女子とその母親との現在、及び過去の関係と抑うつ傾向、自尊感情との関連、さらに、親の養育行動と青年期の子どもの心理的側面との関連が確認されている（例えば、平田, 2005）。しかし、仮定された要因が、どのように影響するのか、その経路に関する知見は明らかではない。そこで、青年期女子に焦点をあて、親については、「親」とひとくくりにせず、同性の親である「母親」、異性の親である「父親」からの影響を要因として分析する方向で進めた。

方 法

調査協力者

東京都と埼玉県の大学生女子（156名、M=19.64 SD=1.91）。内、調査実施時点において、一人暮らし44名、実家からの通学者112名（実施期間：2009年1月）。

手続き

東京都と埼玉県的大学生、大学院生に、講義時間内に質問紙を配布し、その場で回収した（実施時間は約20分）。

質問項目

自尊感情については、Rosenbergの邦訳版（山本・松井・山成, 1982）、子どもから見た父親・母親の子育てについての協力は、父親用・母親用に分け、平田（2005）の配偶者との連携尺度を用いた。父親・母親の養育態度へのイメージは、パーソナリティ認知の測定に有効な尺度（井上・小林, 1985）を用い、子どもから見た父親、母親からの言葉かけについての拒否的態度は、一般的な感情を示す感情測定尺度の嫌悪感情（名取, 2007）を用い、予備調査の結果、それぞれ、選択された上位8項目、5項目を用いた。さらに、自己への肯定、親からの肯定を尋ねる項目を加えて、回答形式は全て6件法で尋ねた。

結 果

因子分析の結果

自尊感情についての因子分析（最尤法、*promax*回転）では、因子負荷量が低かった1項目を除外し、再度、因子分析を行った。原著と同様に単因子構造であると判断された（*cronbach*の α 係数=.85）。順次、因子分析（最尤法、*promax*回転）を施していくと、子育てにおける協力（父親：*cronbach*の α 係数=.83、母親：*cronbach*の α 係数=.86）、父親、母親イメージ（父親：*cronbach*の α 係数=.89、母親：*cronbach*の α 係数=.87）、父親、母親の言葉かけについての拒否的態度（父親：*cronbach*の α 係数=.94、母親：*cronbach*の α 係数=.93）

であった。

パス解析の結果

本研究で予測されたモデルの検討を行うため、自尊感情を目的変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を施し、相対的影響について確認した。結果、自尊感情には自己への肯定が正の影響を（標準化 β =.35, p < .01）、母親の拒否的態度が負の影響を（標準化 β =-.19, p < .01）それぞれ及ぼしていたなど、異性の親である父親の言葉かけよりも、同性の親である母親の言葉かけのほうが、青年期女子の自尊感情に影響していた（調整済み R^2 =.18, p < .01）。これらの手順を踏み、有意な関係が得られたパスを設定したモデルを作成し、全てのパスが5%水準で有意であることを確認し、モデルの適合度を検討した（ GFI =.931 $AGFI$ =.896 CFI =.928 $RMSEA$ =.070 χ^2 (19) = 34.867, p = .001）。しかし、親からの肯定と自己への肯定に個々にパスを引くよりも、親のイメージから、親からの肯定→自己への肯定に修正した方が、モデルの適合度が増加されたので、再度分析を試みた。適合度は増加し、いずれのパスも有意であった（ GFI =.976 $AGFI$ =.944 CFI =.975 $RMSEA$ =.069 χ^2 (19) = 32.867, p = .001）。これ以上の改善は難しいと考え、この値のモデルを採用することとした。

考 察

自分を育てるために父親と母親は協力し合っていると考えている青年期女子ほど、父親、母親、それぞれに「頼もしい」などの肯定的養育イメージを持っていた。この養育イメージは、父親イメージと母親イメージが互いに補完し合うように影響していたことから、母親イメージは単独で青年期女子に評価されるのではなく、父親イメージと合わさり評価されていることが理解された。父親、母親の養育へのイメージは、一見、母親のみが影響し、親からの肯定となり、それが自己を肯定し、青年期女子の自尊感情を押し上げてはいたのだが、そこには、父親の影響が強く存在していることが確認された。まとめると、青年期女子の自尊感情は、娘が勝手に自分ひとりで構築していくのではなく、必ず、同性である母親の自分への評価を経由して、自己評価するという構造が、本研究では実証された。青年期女子の自己への評価は、同性の親である母親の影響が、想像以上に強く作用していたが、母親の養育へのイメージと父親の養育態度へのイメージは互いに補完する影響を及ぼしていたことから、父親からの直接的な影響が見られなくとも、父親の養育におけるサポートは、青年期女子の母親の養育へのイメージを肯定的に受け止めるためにも、より重要な要因と認めることが必要であると思われる。

引用文献

平田裕美（2005）父親の養育行動と高校生の子どもの精神的健康：母親の養育行動との直接比較 お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 平成15年度公募研究成果論文集 2, 71-81.